

ユーザーインタビュー

加藤 拓 様

株式会社 技巧空間 NEO 代表取締役



【略 歴】

2009年 愛知学院大学 歯科技工専門学校 卒業

2010年 大阪セラミックトレーニングセンター 卒業

2010年 グラードメディカルサービス 入社

2012年 株式会社 カस्पデンタルサプライ 入社

2017年 技巧空間 NEO 入社

2022年 株式会社 技巧空間 NEO 代表取締役 就任

【所 属】

日本臨床歯科CAD/CAM学会

一般社団法人 日本歯科技工士会

Aidite ArtTech KOL 公認インストラクター

Aidite

ジルコニアディスク **3D Pro Zir**

ジルコニア用ステイン材 **Biomic ステイン**

デジタル化が進む中で、
加藤先生が特に重視されている「素材選び」。
現在、Aidite社のジルコニアディスク「3D Pro Zir」を
主にご使用いただいている理由を教えてください。

デジタル機材の導入によりフルジルコニア症例が増える中で、仕上がりを左右する要素として重要だと感じたのがディスク自体の特性です。ジルコニアは透過性を高めると、口腔内ではグレー調に沈みやすく、「白浮き」するか「暗くなる」かのいずれかに偏りがちです。

そのような中、さまざまなディスクを検証する中で、シンタリング後に偏りのない自然な美しさを感じたのが、『Aidite ジルコニア3D Pro (以下、3D Pro)』でした。4Y(高強度)・5Y(高透光性)でありながら明度を維持できる点に優れており、現在はベースディスクとして使用しています。また、加工時のチップング(欠け)や焼成後の変形など、ロットによる品質のばらつきが少なく、均一性と安定性の高さにも大きな安心感があります。

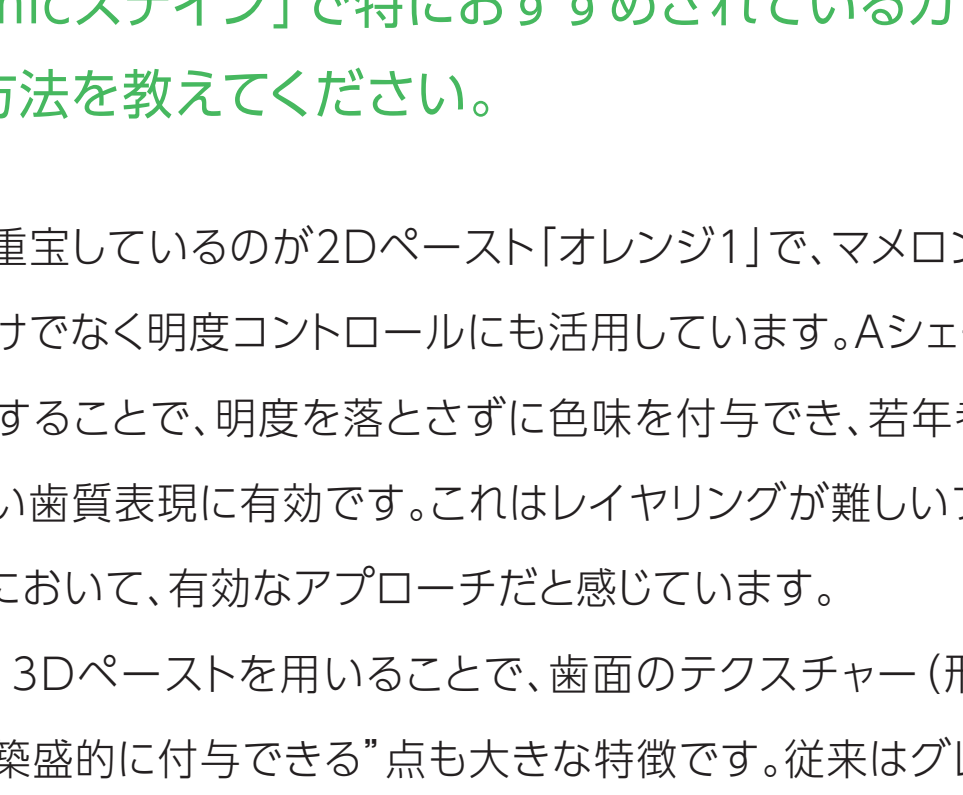


「3D Pro Zir」の性能をさらに引き出す仕上げ材として、
「Biomicステイン」を導入された経緯を教えてください。

それまで長年、納得できるステイン材に出会えず試行錯誤を続けていましたが、藤松剛氏が主宰するデジタルアカデミー(S.T.F Digital Academy)のセミナーをきっかけに『Biomicステイン』を知りました。実際に使用した際、「色数が少なくシンプルでありながら使いやすい」と感じ、すぐにベーシックキットを購入しました。

限られた色数ながら、混和によって幅広い色表現が可能で、在庫管理のしやすさも利点です。また、粘性の異なる2種類のペースト(2D/3D)と希釈液を組み合わせることで、従来の「色を置く」ステインワークにとどまらず、セラミックを盛るように「層を作って色を重ねる」といった立体的な表現が可能となりました。

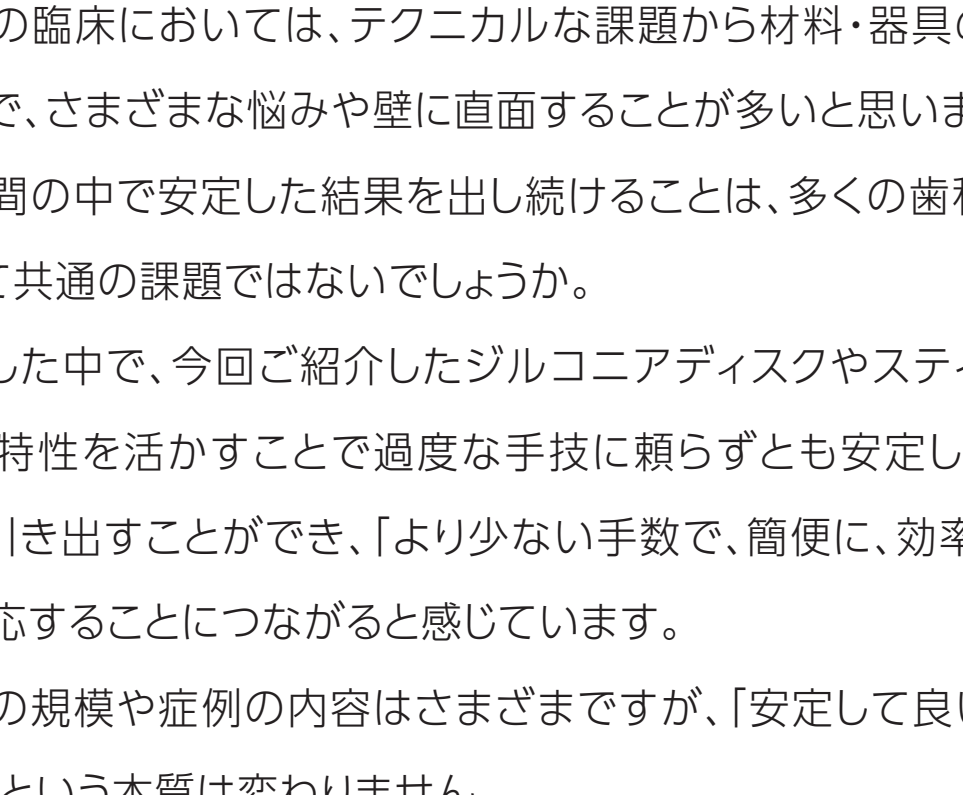
さらに、不透明感や色ムラによる不自然さが軽減され、塗布時と焼成後の色調差が少ないため、完成形をイメージしやすい点も大きな特長です。



ここからは、より具体的なテクニックについて伺います。
「Biomicステイン」で特におすすめされているカラーや
活用方法を教えてください。

特に重宝しているのが2Dペースト「オレンジ1」で、マメロン構造の表現だけでなく明度コントロールにも活用しています。Aシェードに少量混和することで、明度を落とさずに色味を付与でき、若年者のような明るい歯質表現に有効です。これはレイヤリングが難しいフルジルコニアにおいて、有効なアプローチだと感じています。

また、3Dペーストを用いることで、歯面のテクスチャー(形態的質感)を“築盛的に付与できる”点も大きな特徴です。従来はグレース材の厚みの範囲内で削合によりテクスチャーを表現していましたが、ポーセレンを“築盛する”ような表現が可能となります。さらに、希釈液により粘性を調整することでステインの重ね塗りも行いやすくなり、審美表現の幅を広げることができます。最初の導入としてはグレース材「グレースF」も扱いやすくおすすめです。薄く塗布するだけでも十分な光沢が得られ、操作性にも優れているため、日常臨床において非常に扱いやすい材料です。



自分に合ったジルコニアディスクやステイン材選びを
模索されている方も多いと思います。
そうした方々へ、アドバイスをお願いします。

日々の臨床においては、テクニカルな課題から材料・器具の選定に至るまで、さまざまな悩みや壁に直面することが多いと思います。限られた時間の中で安定した結果を出し続けることは、多くの歯科技工士にとって共通の課題ではないでしょうか。

そうした中で、今回ご紹介したジルコニアディスクやステイン材は、材料の特性を活かすことで過度な手技に頼らずとも安定したクオリティを引き出すことができ、「より少ない手数で、簡便に、効率よく」症例に対応することにつながると感じています。

ラボの規模や症例の内容はさまざまですが、「安定して良いものをつくる」という本質は変わりません。

今後も、材料や技術への理解を深めながら臨床に還元し、セミナー等を通じて情報発信を行い、現場の一助となれるよう取り組んでいきたいと考えています。

